



## 目次

### 1. 「巻頭言」

実用英語教育学会会長 釣晴彦（札幌学院大学人文学部 教授）

### 2. 「第6回研究大会報告」

#### (1) 基調講演

海外における日本人教育とグローバル社会  
—ドバイとマニラで見たことばと文化のタペストリー—

厚真町立厚真中央小学校教頭 猪股俊哉

#### (2) 研究発表

研究発表1 「グローバル人材と日本人の英語力—諸外国との比較—」

北海道情報大学 竹内典彦

研究発表2 「インドネシアの文化と英語教育」

北海道札幌東稜高等学校 原田 晋

研究発表3 「早期英語教育における ALT がカリキュラムに与える影響

～幼稚園導入のケースから」

北海道千歳高等学校 山崎秀樹

#### (3) フォーラム

### 3. フォーラムパネリストへの質問：「これからのグローバル化社会で求められるもの」

### 4. 【連載】小学校から始まる実用英語教育：

「ほめる・頼む・感謝する・同情する（2）——頼む・感謝する」

# 巻頭言

## 実用英語教育学会 第6回研究大会を終えて

実用英語教育学会会長 釣 晴彦  
札幌学院大学人文学部 教授

実用英語教育学会第6回研究会を終えて、一言ご挨拶申し上げます。

「日本のグローバル化と英語教育の接点を探る—低年齢化するこれからの英語教育への指針—」という主題のもと、研究報告の最初は、北海道情報大学竹内典彦先生の発表「グローバル人材と日本人の英語力—諸外国との比較—」でした。現在グローバル人材育成教育学会北海道支部長として活躍しておられるだけあって、統計や分析を用いてグローバル人材育成の現状、課題と今後の方向性を示した良い発表でした。特に、EFL (English as a foreign language)、すなわち、英語を私たちが外国語として正しく学び取るべきことばとして教えるという従来のあり方を超え、EGL (English as a global language)、すなわち、英語を世界市民としての自分たちのことばとして教えていこうという提案は大変納得のいくものでした。もっと時間を取り、意見を交換しながら深めたい考え方だと思いました。

その次の研究報告者は、札幌東陵高校原田晋先生でした。「インドネシアの文化・教育と英語教育」という題でした。ご本人はインドネシアに大学時代から関わっていらっしゃるので、現地の生活様式を詳しく比較研究されており、大変興味深い内容でした。今後ライフワークとして研究を続けていらっしゃるようですが、次の発表が楽しみです。

3人目は千歳高校山崎秀樹先生でした。山崎先生は、今年度から「早期英語教育におけるALTがカリキュラムに与える影響—幼稚園の導入ケースから」と題して研究調査を行っています。奥様とお子様の環境をつぶさに観察できるので大変貴重なデータが揃いそうです。まだ中間報告段階ですが、今後の展開が楽しみです。

基調講演者は厚真町立厚真中央小学校教頭猪股俊哉先生でした。「海外における日本人教育とグローバル社会—ドバイとマニラで見たことばと文化のタペストリー」と題して、自らの日本人学校の経験からお話をいただきました。海外で学習する児童生徒は8万近くいるそうです。日本国内とは異なる生活環境、言語環境、学習環境の中で、英語もしくは現地語を理解し、異文化を受け入れ、日本人としてのアイデンティティを身につけていくことは容易なことではありません。今回は、民族衣装も持参され、宗教的理由からだけでなく、風土に根差した機能的な役割を持っていることを具体的に説明しながら、異文化理解は、一つの見方に偏らず、多面的な視点が必要であることを教えてくださいました。現地の生活の経験者ならではの説得力のある楽しい講演でした。日本人学校の実態は、報告会等に出席して拝聴する以外、なかなか知ることはありません。それを2校もの現場で経験された猪股先生の報告は、大変貴重なものでした。

フォーラムは、パネリスト一人一人のキャリアの違いからくる多様な視点がグローバル化というテーマと交錯して、いろいろと考えさせられる、刺激的な展開になりました。パネリストは猪股俊哉先生、原田晋先生、渡部淳先生(北海道文教大学国際政治経済学者)、平塚隆寛さん(北海道大学薬学部生。ドイツミュンヘンインターナショナル校を卒業)の4名でした。日本のグローバル化は、英語教育の低年齢化がいま一層の拍車をかけ、推進されています。そのような中で、国際政治・経済の現状に詳しい渡部先生のととても現実味のある考察や、これからの時代を担う平塚さんの経験や思考にふれ、日

本のグローバル化の在り方について有益な示唆を受けることができたと思います。

学会のこの一年の活動には、秋の研究会と今回の研究大会に加え、協力事業として、11月26日札幌旭丘高校で開催されたカリフォルニア大学サンディエゴ校當作靖彦先生のレクチャーとワークショップ。そして、後援事業として、3月12日千歳で行われた劇作家・演出家平田オリザ氏の講演会がありました。お二人とも、日本のみならず世界各国で活動なさっています。當作靖彦先生の「評価のパラダイムシフト」が教育観を演繹的手法で構築していく視点と考えれば、平田オリザ氏は、帰納的手法で1つ1つの状況を具体的に考証して構築していく視点であります。この両者は相反するのではなく、むしろどちらの視点からも考察することが大事であることに気づかされました。平田オリザ氏が3時間近くかけて15名の高校生に対して行ってくださったワークショップは、誰が経験しても参考になる内容でした。それは、場面や状況の人間関係に応じて使用する言葉は、文化や国によって認識のズレがあると。そのズレに気が付き認識して調整していく能力

が必要であると。言語教育に携わっている私達でも、普段は、その認識のズレに気が付き、調整して合意形成をしていくという活動が少ないのかも知れません。

平田オリザ氏の講演は、これからのグローバル社会で求められるコミュニケーション能力について参加した皆さんを納得させられるとても説得力のある内容でした。学会事務局長の久野先生も、講演後の私への私信の中で次の様に書かれていました。「EGL(English as a global language)という考え方もさることながら、EGC(English for global communication)がこれからの実用英語の最高目標とやらなくちゃいけないとも思いました。」私もこの見解には大賛成です。

実用英語教育学会は、小中高大とその前後に連なる生涯学習・生涯教育としての英語学習・英語教育における教員の連携をミッション(社会的使命)として活動を続け、活動を広く共有できる方々と、手法をさらにシェアして共に学んで歩んで行きたいと考えております。

今後とも一層のご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

## 第6回研究大会について

2017年2月18日（土）札幌大谷大学セレスタ教室において、第6回研究大会が開催され、高校・大学教員のみならずさまざまな分野でご活躍の方々にご参加頂きました。本大会では、3つの研究発表、基調講演、フォーラムを実施いたしました。

参加者は合計で22名となり、盛会のうちに終了することができました。

## 基調講演

### 海外における日本人教育とグローバル社会 —ドバイとマニラで見たことばと文化のタペストリー—

厚真町立厚真中央小学校教頭 猪股俊哉

2か国の日本人学校で勤務した経験を通して見えてきた言葉と文化の問題から、英語教育について話して頂きました。以下が講演の概要です。

#### 1 自己紹介

2001年から4年間、アラブ首長国連邦（UAE）のドバイ日本人学校に勤務

2012年から3年間、フィリピン共和国の在フィリピン日本国大使館附属マニラ日本人学校に勤務

\* ドバイに着任した年の9月にニューヨーク同時多発テロ9.11が起き、翌朝には、「親米国の日本人が通う学校」ということでドバイ日本人学校正門前に、UAE政府が、銃を携行した警官と小屋を配備してくれた。この時、近くのアメリカンスクールでは、防御のための分厚いコンクリート壁が周囲に置かれるなど、緊迫した事態を実感させられる。

\* ドバイの人口の8割は外国人であり、その中で2番目に多いのがフィリピン人（OFW）であり、ドバイの経済を支えている。2回目の日本人学校勤務は、そのフィリピン共和国への派遣となった。

#### 2 日本人学校について

日本人学校は、現在、全世界に89校あり、約8万人の子女が在籍している。日本人学校は、現地の日本人会などによって設立され、文部科学省が認可し、文科省が教師を派遣する全日制の私立学校である。このほかに在留日本人子女が利用可能な教育施設には、私立の在外教育施設、主に英語で授業を行う国際学校（インターナショナルスクール）、補習授業校（現地の学校や国際学校等に通学している日本人の子女が、土曜日や放課後などを利用して国内の小学校又は中学校の一部の教科について、国語を中心として、算数（数学）、社会、理科などを日本語で学習する施設）がある。現地の言葉で授業を行う現地校もある。

日本人学校に通っている生徒の割合は、対象者が3万人いるアジア圏では50%、欧州では15.7%、北米では学校数が少なく2.1%であり、日本人学校の多くは、アジアに集中している。

### 3 ドバイからマニラへ

#### (1) ドバイ

第一言語はアラビア語、イスラム教が主な宗教で、金融や観光が主産業である。近代的な街並みを少し離れると砂漠が広がっている。気温が50度を超えることもある砂漠気候の地である。現地の代表的な服装は、女性は、家族以外には一切肌を見せない宗教上の理由から、アバヤと呼ばれる黒い布とシーラと呼ばれるスカーフで全身を覆っている。アバヤの下は、お洒落でかつ結構派手な色合いの服も着ており、外食の時は周囲から見られぬよう女性の周りには衝立が置かれることもある。また、男性はディッシュダーシャと呼ばれる白い服をまとっているが、時と場合によって着方やスカーフの色を変えるのも特徴的である。男女ともに宗教上の理由だけでなく暑さや砂から身を守るという気候上の理由もある。

ドバイの住民の8割は外国人で、筆頭はインド人、ついでフィリピン人（OFW）である。

社会全体が、イスラム教で動いているが、イスラム教で大事なものは、信仰告白、礼拝、断食、喜捨（貧しい人にお金をあげる）、巡礼の5行である。また、目上の人に敬意を払うこと、お年寄りを大事にすること、自分より貧しい人を大事にすること、家族を大事にすることといった習慣がある。してはいけないこと（宗教上の禁忌事項）は、飲酒、豚肉を食べること、ギャンブル、偶像崇拜などがある。また、小さい頃から家族以外のところでは、男女が別々という特徴もある。

ドバイ日本人学校における英語教育は、小学部1年から中学部3年まで英国人教師による英会話の授業が行われていた。中学部での通常の英語科の授業ではALTが入り、ほとんどが英語で行われていた。

また、アラビア語の授業も、ドバイ教育省により義務付けられており、アラビア語のネイティブが英語で教えていた。小学部1年生から週3時間は、英語でアラビア語を学習していることになる。

#### (2) マニラ

第一言語はタガログ語で、キリスト教を主な宗教とし、農業と観光を主産業とする熱帯雨林気候の地である。正装にはバナナの葉の繊維で織られた布地のシャツであるバロンを着る。フィリピンは日本の6,852を超える7,107の島々からなる多島海国家で、セブ島やエルニド島などが、リゾートアイランドとして有名である。

フィリピンでは、国の政策で、小学校1年生から英語教育が実施されており、全国民が英語を話すことができることにより、海外でもOFW（Overseas Filipino Worker）として、世界中で活躍している。ちなみに日本に中長期滞在しているフィリピン人は約22万とも言われている。

フィリピンでは、ドバイにおける禁忌事項である豚肉が好まれ、豚の丸焼き（レチョン）が店頭にとり狭しと並んでいる。また、年中暖かい南国であるため、マンゴーやドリアン、バナナなどのフルーツも豊富である。ただ、アジアで唯一、許可を得て銃を所持できる国であり、犯罪も多く、治安に課題がある。

マニラ日本人学校には、日本から派遣されている日本人教師に加え、現地採用のナース（養護教諭はいない）、公用車の運転手、事務員、用務員、スクールバスのドライバーとバスアテンダント（間違いなく保護者に児童生徒を引き渡す乗務員）、警備員、売店の店員などを合せて総勢60名近いスタッフがいた。警備員は、昼夜2交代制で、12名で学校正門及び校地周辺を警備している。もちろん全員が、学校内の安全確保のために銃を携行している。児童生徒の通学の安全確保は最重要課題であり、ほぼ半分の児童生徒がスクールバスで通学している。残りの児童生徒は、保護者の自家用車による送迎である。自家用車で登校する時は、学校発行のIDの提示が義務づけられており、徒歩通学は誘拐等の未然防止のため許されていない。

マニラ日本人学校には、当時小学生約320名、中学生約80名が学んでいた。近くにアメリカンスクール、ブリティッシュスクール、ローカルスクールがある文教地区にあり、児童生徒の交流がさかん

に行われていた。

学習内容については、検定教科書を使用し、学習指導要領に沿って日本人教師によって日本語で学習が行われる。また、学校行事においても、運動会、学習発表会、遠足、見学学習、修学旅行、職場体験、夏休み・冬休みなどと日本国内と同様である。これは、日本と同様の教育を行うことが日本人学校の目的であることは言うまでもないが、児童生徒がいつ日本に帰国しても、スムーズにストレスなく日本国内の教育について行けるようにするためでもある。日本の小中学校との違いとしては、小学校1年生から英会話の授業があることである。英会話の授業は、小学生が週2時間、中学生が週1時間実施されており、教員免許をもった6名のフィリピン人が教えていた。1つの学年を6つの習熟度別の学級に分け、オリジナルの自作英会話の教科書を使用していた。中学生は、教育課程の英語科の授業の他に英会話の授業があり、ほぼ毎日英語の授業が行われていた。

また、保護者の3割近くが国際結婚家庭であり、多くは日本人の父親と現地人の母親であるが、母親が日本語を十分に理解できないことが多いため、学校からのお知らせ文書などは英語の翻訳が必要だった。また、日本とフィリピンの学校のシステムや文化や習慣の違いからトラブルが起きることもあった。さらに、児童生徒は家で父親と日本語で話し、母親と父親は英語またはフィリピン語で話し、児童生徒は母親と英語もしくはフィリピン語で会話をすることになるため、児童生徒の生活言語が日本語と英語とフィリピン語が混ざり合うことになる。特に小学校低学年では主言語が確立しておらず、言語習得の面で混乱が生じることがある。

#### 4 海外で学習するということ

##### (1) 英語学習の観点から

英会話の授業があることで、小学校1年生から英語に触れる機会が多い。また、学校内の職員も日本人よりも現地スタッフが多く、必然的に英語に触れる、英語を使わざるを得ない場面が多くなる。学校の外に出て学習する現地校との交流、校外学習、修学旅行、遠足など英語学習の機会が多い。また、家庭においても、ドライバーやメイドとの会話や習い事や買い物などの日常生活で使わざるを得ないなど、英語の授業以外に英語に触れる機会の多さが挙げられる。ただ、学校で学習する学習言語と家に帰ってからの日常生活の中で使う生活言語のずれは大きな課題ともなっている。特に国際結婚家庭の子女は、生活言語に触れる機会が多く、英語を流ちょうに話すことができるが、きちんとした英文を書くことや、英語のテストなどの学習言語については、大きな課題がある。

##### (2) 日本人学校の教育活動の観点から

英語に触れる機会が多いのは、英語力向上に資するという利点ではあるが、教育活動全般からみると、日本と同様な教育環境が確保できないという問題がある。

日本語環境という点から見ると、日本語を使える場面は、学校と家庭だけである。児童生徒の生活環境の中で日本語に触れられないのは海外であるので当たり前であるが、さらに、教材教具、参考書、問題集が手に入りにくい。日本の書籍を売っている書店もなく、新聞も高価で1日遅れて配信される。テレビも日本のように自由に見られる状況にない。このように、日本語の学習環境は予想以上に十分ではない。このことは、小学校低学年などの児童の日本語習得に少なからず影響すると思われる。

体力維持、向上という点から見ると、体を動かす機会は、日本国内の学校と同様に学校での体育の授業であったり、休み時間や昼休みの時間であったりする。しかし、日本と違うところは、放課後や休みの日の運動や外出が制限されることである。学校にはスポーツ少年団や部活はないため、個人的に放課後水泳をなったり、地元のサッカーチームに所属して練習したりすることになる。また、治安の問題や気候の問題も課題として挙げられる。

話は変わるが、日本人学校ならではの課題がある。保護者によってはさらなる英語力の向上を期待している場合がある。そのため、日本人学校の英語学習以上をもとめて、インターナショナルスクールに転校するケースもある。その一方で、中学、高校への進学を伴う帰国が近付くと、日本の教育課程を終えたことを証明する卒業証書が必要になり、日本人学校に戻ることを希望するという事例もみられた。（現在はインターナショナルスクールからも高校進学が可能になっている。）

### （3）帰国後の観点から

日本人学校から帰国した時に、児童生徒がスムーズに日本の学校環境に戻るためには、学校教育の点から、いくつかの課題がある。

- ①海外で身につけた英語力を維持し、さらに向上させること
- ②学齢期程度の国語力（日本語力）を維持すること
- ③日本の教育内容についていけること
- ④日本の学校文化に順応し、人間関係を築くこと
- ⑤日本の生活習慣に適応すること
- ⑥スポーツ少年団や部活などに参加できること。

海外で身につけた経験、感覚を生かし、日本の生活に上手に順応しつつ、自分の将来に生かしていくことが求められている。

（要約：柴田）

## 研究発表

### 研究発表 1

#### 「グローバル人材と日本人の英語力—諸外国との比較—」

北海道情報大学 竹内典彦

日本のグローバル化が進んでいる。ソフトバンクの人型ロボット「ペッパー」の開発チームは、ソフトバンクグループのアルデバランロボティクス社（拠点フランス）である。社内公用語を英語にした楽天、ユニクロは多数の外国人を採用している。「ユニクロ」を展開するファーストリテイリングでは、2010年の国内新卒採用者約 200 人のうち、外国人が約 100 人だった。楽天は 10 年度の国内新卒採用者約 400 人中、外国人が 17 人で、現地採用では中国で 15 人、インドで 21 人を採った。楽天は 2015 年 4 月現在の従業員の TOEIC 平均スコアが 990 点満点中 802.6 点となり、2010 年の平均点（526.2 点）から大きく上昇した。日本人社員の英語力が向上したことも事実だが、外国人採用が平均点を押し上げた。

世界がグローバル化し、日本もまたグローバル化が進む中、世界的に見ても日本人の英語力は下位に低迷している。経済産業省によると、2010 年の TOEFLiBT（120 点満点）スコアの国別ランキングでは、日本は 163 か国中 135 位、アジアの中では 30 か国中 27 位と下位に低迷している。

このように成功しているとは言えない日本の英語教育を改善する方策として、「教え方」だけでなく、「学習時間」に注目してみたい。よく「大学まで英語を勉強してもものにならない」と言われるが、そもそも中学・高校の授業時間数は 800 時間程度である。English Tutors Network の調べでは、TOEIC で 900 点以上の英語指導者は 4000~5000 時間の学習時間と申告したという。圧倒的に学習時間が足りないのである。

学習指導要領の改定で、小学校3年から週1時間の外国語活動が始まり、5年から教科としての英語学習が始まろうとしているが、世界には、オランダなど、小学校1年から英語学習が始まり、週に数時間の授業がある国がすでに存在する。オランダの英語教育を見てみると、脳細胞の多い5歳（小学校）から英語教育を始め、7歳までは「大声音読」を重点的に、8歳以上になると「速音読」に取り組む。速音読→シャドーイング（1セット5分を3セットまで）に移り、その他にアメリカのテレビ番組である「スポンジボブ」などのアニメやドラマを観るといふ。高学年になると英語とオランダ語で逐語訳訓練をして、文法はハイスクール（12歳から6年間）から取り組む。つまり小学校でスピーキングやリスニングができる（スピーチバイリンガル）ように。中学校以上で文法を学び、リーディングやライティングを習得する（テキストバイリンガル）のであり、実に合理的である。

オランダは前述の経済産業省調べの2010年のTOEFL iBTで、世界163か国中、第一位の平均スコアで100点であり、日本は70点であった。オランダ語と日本語は、英語との言語的距離が違うので一概に比較できないが、オランダ式英語教育法に学ぶ点が多いと考える。オランダでは大学卒業後、英語圏で半年生活して、自分の英語学習の総仕上げをするという。ロイヤル・ダッチ・シェル、ユニリーバ、イケアはオランダに本社があるが、それは英語ができる人材が得られるためであり、オランダ生まれの企業でも、Oilily（オイリリー）やG-Starなどは、社内の公用語が100%英語である。

オランダのように小学校1年から英語を学ぶことになれば、それだけ英語学習時間が増え、国民全体が実用可能なレベルの英語力を習得できる可能性が増す。我々は日本人であると同時に地球人であり、世界共通語が英語である以上、「高校大学まで英語を勉強してもものにならない」という言説が昔話になるような制度の下で、早い段階から英語を学ぶ必要がある。「外国語としての英語」(English as a Foreign Language) というより「世界共通語」(English as a Global Language) として英語をとらえるべきであり、我々日本人は「国内語としての日本語」(Japanese as a Domestic Language) と英語の「2言語話者」(monolingual から bilingual へ)であるべきという認識と自覚を持つ時代がそこまで来ていると考える。

## 研究発表2

### インドネシアの文化と英語教育

北海道札幌東稜高等学校 原田 晋

インドネシアは人口約2億5千万人、500以上の民族からなる島嶼国家である。ヒンズー文化、仏教文化、イスラム文化、キリスト教文化など多様な文化の影響を受けた国でもある。長らくオランダの植民地にあり、第2次世界大戦中は日本の統治下にあった。

そのような国では1945年の独立までの民族独立闘争の過程で自らの文化を大切にする土壌が築かれていった。また、インドネシア語が国語として用いられているが、日常会話ではそれぞれの地方語を話すことが多く、バイリンガル国家でもある。多様な文化、言語を持つインドネシアの「教育」にはどのような特徴があるのだろうか？

タマンシスワ Taman Siswa はジャワ語で学童の園を意味する民族主義的な私立学校である。ジャワ古来の寄宿塾（プサントレン）の理念にタゴールのアジア的人間理念とモンテッソリ、フレーベルなどの西洋の教育観を取り込んで、インドネシア、ジャワ島の中心部、ジョグジャカルタに設立された。植民地の教育に対するものとして、インドネシア各地に広く受け入れられた。設立の中心者であるデワントロは初代教育文化大臣となり、民族の文化を大切にする教育は、独立後も共和国の教育に大きな影響



を与えた。

現在のインドネシアの教育（カリキュラム）には次のような特徴がある。「宗教と礼節」、「パンチャシラと国民教育」などの人格形成教育科目の授業時数が多い。人格形成教育科目では、イスラム、プロテスタント、カトリック、ヒンズー教、仏教、儒教の6つに分けられ、宗教ごとの信仰の実践が内容であり、宗教のそれぞれの実践を通じて、6つの宗教に共通する人格形成の目的に到達することが期待される。また、英語の重要度が増す一方で、インドネシア語、地方言語、地方文化も重要となっている。

英語はインドネシア語の開発源として重要度が増し、2000年代にグローバル化とともに英語の使用がいきなり拡大した。日常生活に様々な形で英語が入りこんでいる。中学校、高校では英語を使う授業が浸透しつつある。しかしながら、2013年、小学校のカリキュラムから英語がなくなり議論を呼んだ。都市部では課外活動として、英語の授業が行われるようになっている。

英語教育の目標は、精神的要素、社会的要素、知識、技術に分類されるが、その精神的要素、社会的要素は人格形成教育の内容と同じものである。つまり、英語の授業の中でも人格形成教育が行われ、評価などの対象となっている。人格形成教育（宗教的要素、社会的要素）とグローバルな英語力（知識、技術）を育むことの両方が英語教育の目標である。

2004年に「*Discourse Analysis approach*」が導入され、*Discourse competence*が英語力の最終的な目標となっている。それぞれの学年での到達目標（核心能力、基礎能力）が定義され、その育成のためにシラバス、レッスンプランが作成されている。

### 研究発表3

#### 「早期英語教育における ALT がカリキュラムに与える影響 ～幼稚園導入のケースから」

北海道千歳高等学校 山崎秀樹

この研究発表は、独自に外国語指導助手（ALT）を雇用し、初めて英語教育を導入した幼稚園が、ALT が業務を通して得た知見と英語教育のノウハウを活用させ、その後のカリキュラムの作成にどのように寄与するかを調査しているものを中間発表したものである。

2016年度4月、それまで英語教育を一切行っていなかった北海道恵庭市のE幼稚園は、フルタイムの英語教育を導入すべくALT3名を雇用し、常時ALTがいる環境を作った。幼稚園指導要領にある、いわゆる「5領域」の育成に従い、「遊びを通じた学び：野外活動、食育、仏教精神による園児の育成」という園の方針を変えず、従来の活動に英語を加える英語教育を導入した。3名のALTは週5日、2人体制で常駐している。

リサーチ方法は、3名のALTと施設長を対象に、導入時（2016年4月）から振り返り時（2016年10月・2月）までの半年間の英語活動に関して、保護者へのアンケートを2回、ALTと運営者へのインタビュー（非構造化面接法）をしたものを録音して記録した。

質問内容に関しては、1）ALTには、①4月からの子どもの変化、成長と導入効果、②プログラムの内容について、③今後の目標、活動内容と方針について、2）運営者には、①「最初の半年は運営側からALTに目標を指示したり、設定せずに、ALT自身にまず実践してもらい、半年後振り返りを行った理由、②今年度の英語教育の調査時点での成果を聞き取った。さらに、3）保護者には、幼稚園の英語教育導入への意見、家庭での英語教育に関する調査、英語教育導入後の園児の変化を質問紙を用いて調

査した。(回答数 170)

現時点での調査結果は幼稚園の英語教育の導入とマネジメントに多くの示唆を与えてくれる。特に、ALT に裁量権が多く与えられ、最初の 6 ヶ月は設定された達成目標や指導内容の縛りがなく、ALT はそれぞれの経験を生かし、園の学習である遊びに英語で参加してもらったことが、半年後以降のカリキュラムに大きな影響を与えている。このことは、大谷 (2007) が指摘する、日本の学校文化の中で ALT と日本人教員が感じる当惑や戸惑いや協働で指導を行う上での課題解決の糸口となり、上原ら (2008) が調査した、日本人教員と ALT とのチームティーチングで起こる意思疎通、仕事の共有や協働などでの課題の克服、さらには、効果的な早期英語教育導入のマネジメントへの示唆になると考えられる。

特にこの調査からわかることは次の 3 点である。①あらかじめ設定された突飛な目標や指示、ゴール設定がないことで、ALT は比較的自由に、毎日の実践から得られるものをこの機会に共有することで、目標設定ができたこと。②子どもたちの現状や様子を見て、どこまでができてどこまでができず、次の課題を明確にできたこと。③ALT が経験したことが次のゴール設定に生かされることで、ALT 自らが英語教育を担う「自治権」が得られ、それが「任されている」という有用感や内発的な動機付けを生む点である。

さらに、ALT や施設長とのインタビューから、日本の学校教育現場から聞かれる ALT との運営協働に関するヒントになるであろうコメントが得られた。

現時点では研究の途中経過の発表であり、この幼稚園の英語教育に関して、さらに深く核心に迫るリサーチや考察が必要であるが、これから早期英語教育を導入していこうとするほかの幼稚園にとってもよいモデルケースとなるであろう。

#### <引用文献>

上原景子 & フーゲンブーム, レイモンド B. (2009) 「『日本人教師』と『英語を母語とする ALT』とのチーム・ティーチング：異言語間・異文化間の意思疎通における課題」『群馬大学教育実践研究 別刷』, 26, 77-88.

大谷みどり (2007) 「外国人指導助手 (ALT) と日本の学校文化」『島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学)』, 41, 105-112.

## 「日本のグローバル化と英語教育の接点を探る— 低年齢化するこれからの英語教育への指針」

研究大会のしめくくりとして、大会テーマを受けてフォーラムを行いました。以下の方々(略称略)を司会及びパネリストに迎え、フロアからの質問を適宜受けつけながら進めました。約1時間にわたるフォーラムの内容をまとめ、その概要をお伝えするとともに、併せて、時間内に扱えなかった一つの重要な質問について、後日パネリストの方々から送っていただいた回答をご紹介します。

- 司会・進行： 釣 晴彦 (札幌学院大学教授)  
パネリスト： 猪股 俊哉 (厚真町立厚真中央小学校教頭)  
原田 晋 (札幌東陵高等学校教諭)  
渡部 淳 (現北海道文教大学准教授)  
平塚 隆寛 (現北海道大学薬学部大学院1年生)

---

### 概要

---

釣：猪股先生と原田先生は先ほどお話があったので、渡部先生と平塚さんから自己紹介していただきたい。

渡部：北海道文教大学で国際政治経済学、国際関係論を教えている。人口よりも牛の数の多い北海道の伊達市に生まれたが、グローバルと言えばイギリスのウォーリック大学で学び、その後はドイツの研究機関で働いた経歴を持つ。

平塚：北海道大学薬学部の大学院生である。小学校5年生から高校3年生までドイツのミュンヘンにあるインターナショナルスクールで学んだ。学業の傍ら、海外駐在コンサルタントとして英検や TOEIC、中学、高校、大学の入試対策の授業をスカイプを使ってしている。

釣：パネリストの皆さんから、日本と違うと感じたことを話していただきたい。

猪股：ドバイはベースに宗教があることを感じた。入国カードで宗教を入力する欄があり、驚いた。

原田：インドネシアの日本人学校についてはあまり知らないのですが、現地学校について話したい。中東よりもゆるやかなイスラム教で、やはりインドネシアでも宗教は大切にされていた。

渡部：イランに行くと日本とは全く異なっていて、まるで違う惑星のように感じた。もともとはペルシャ帝国であり、とても歴史のある国である。どの国もそうだが、実際に行かなければわからないことが沢山ある。例えば、ドイツでは教会税というのがあって、キリスト教徒で税金を支払うことになっている。生活体験そのものから、いろいろ学ぶと思う。

平塚：小学校5年生で海外に渡ったため、授業についていくのは大変だった。親や先生に頼るのではなく、自分で解決しなければならなかった。ドイツ語もわからない段階でも友達は何より大切だと考え、サッカーを通して友人を作った。苦難をひとつひとつ乗り越えていくことが、海外で学べること。自分が海外に行く機会があれば、自らまた苦勞を経験したい。

釣：ここでフロアーの方が聞いてみたいと思うことがあれば、お聞かせ願いたい。

フロアー：日本人学校にはあこがれがあるが、まわりの日本人学校に赴任した先生方からは大都市には行くなと聞く。自分なりの解釈では、親や企業からの期待やプレッシャーがあり、縛られてしまうからではないかと思っている。その点はどうであろうか。

猪股：保護者からの期待は大きいと思う。保護者は、日本に戻ってから子どもが日本の学校や社会でやっていけるのかという不安を持っている。そのため、教員もしっかりとその点をふまえて指導しなければと思っている。また、日本のように豊富な教材もなく、自由に手に入らないことが課題となっている。しかし、それはプレッシャーとは違う。

平塚：確かに日本の本を自由に買えないのは、勉強する上では大きな妨げにはなっていると思う。

猪股：平塚さんが先ほど自己解決とおっしゃっていましたが、まさにその通りだと思うのだが、なきやダメなのかというところもそう言うわけでもなく、ない中でいかにしてやっていくか、解決していくかが大切。困っているもの同士で協力してやっていくというのは、日本人の良さである。

フロアー：平塚さんの周りには他にも学校はあったと思うが、他の学校との交流はあったのか。あったとしたら、日本に帰ってからのことを話したりはしたのか。

平塚：僕はドイツに行った際には初めから最短でも4年という長期滞在であることがわかっていたので、帰国のタイミングについては気にしていなかった。受験のことを言うと、僕の頃とは違って、今は帰国子女入試や特別枠の入試は競争率が高くなっている。成績は良くなければならないし、その他に何か強みを持っていなければならない。受験のために習い事をしなければならなくなると、生活が息苦しくなるという気がしている。だから、海外に住むメリットでメリットを考えるのではなく、子どもだったらまずは楽しんでほしい。親は子どもが成長していく姿を見守って、子どもの実力にあった学校に行かせてやるのが良いと思う。

釣：先ほどの竹内先生の発表で **English as a Global Language** という話があったが、日本は **EGL** とグローバル人材の育成についてどうすべきか。

渡部：政治学が専門なので、これについては言いたいことが沢山ある。グローバルと言う環境の中で英語をどうとらえるかと言う問題であるが、本当に英語だけが必要なのかを考えてほしい。例えば北海道においては、英語は英検2級があれば十分である。グローバルと言っても、実際には片言の英語で何とかなっている。中近東や東南アジアの話聞いても、英語が絡んでくるのは事実である。ただ、これから中国人観光客が増えていくと思うが、英語オンリーという考えは捨ててほしいと考えている。片言で

もいいから通じる英語、プラス one。もしくは、中近東と仕事をするのであれば、アラビア語、それに加えて英語になる。

日本はどうも、第一言語は日本語で、第二言語は英語というように凝り固まった考えをしている。世界で生活した人たちが日本に帰ってきて、就職試験は20年前と何ら変わっていないなど、自由に生きられるようにはなっていない。大学も相変わらずセンター試験をやっている。話を元に戻すと、グローバル人材を英語が話せる人のようにとらえてしまっているが、そうではないと思う。グローバルな人というのは、単に英語ができるという人ではなく、自律性のある人のことである。日本語も、ビジネス語としてインパクトのある言語であるということを忘れないでほしい。自律性のある人と言えば、北欧の人が思い浮かぶ。北欧の資源は、人しかいないため、自分で困難を乗り越えていく力が必要である。自分で批判的に考えて行動するのが、自律的な人である。日本の学習指導要領では、社会的な内容を議論するようなものがないため、自分で批判的に考えて行動する力を養うことが難しい。

平塚：グローバルであるというのは、自分の国をよく知り、何を話すことができるのかということが重要である。

猪股：日本人学校の生徒は、英語が母語でない様々な国の人が話す英語を聞き、教科書以外の英語を理解していく。英語の多様性を理解している。

原田：シンガポールでは、英語を話すことができるが、母語であるマレー語を話すことができない人がいる。英語が話せるということが、グローバルなことであるとは言えないのではないかと。

フロアー：国際結婚が増えているので、子どもの教育が気にかかる。

フロアー：幼いころから、家庭で日本人の母親から英語で話しかけられたり、英語でDVDを見せられたりして、バイリンガル教育を受けて来た。日本人なのになぜ英語を話さなければならないのかと、疑問に思ったことがあった。

渡部：ヨーロッパでは国際結婚が多く、家庭で両親の母語が異なることはよくある。子どもは柔軟に言語を使い分けている。日本人が英語を学ぶことができる利点は、日本にはしっかりと母国の文化があるので、それを基礎として比較しながら、英語を学ぶことができる。逆に、アメリカなどで英語しか知らない人よりも、英語を母語や母国の文化と比較しながら学んでいる人のほうが、グローバルであると思われる。

釣：北海道教育委員会が出している、生徒の英語力向上推進プランでは、英語の資格試験を指標として示している。点数で、グローバル度を示そうとしている。

平塚：強みは常に2つあったほうが良い。英語ができるだけでなく、それ以外にもう1つ何か強み、得意な分野を持つことが大切である。そうすることで、活躍する場が広がる。

渡部：日本では、英語ができなくても生きていける。日本人も追い込まれればできるようになる。グローバル人材を育てるためには、教養や心が豊かな人を育てることが重要である。日本は、教育にお金をかけていない。この予算で、現在の日本の教育の高い質を保っているのは驚きである。

猪股：日本人学校の生徒の保護者自身が、病院や幼稚園、習い事や買い物など、子どものために現地でのコミュニケーションが必要不可欠であるため、英語を使う機会が増え、結果的に英語が上達していく。

原田：インドネシアの日本人学校では、総合的な学習で現地の学校と交流を行っている。その際、英語で会話をするため、英語を使う必然性が生まれている。

釣：行政は、今日のフォーラムで出たような、グローバルとは何かという本質的なことをもっと見て、数値でグローバル化を示したり、外国人教員を増やしたりすればグローバル化問題は解決するという考えであるかのようなやり方だけは考え直してもらいたい。

(要約：三浦・杉浦)

**質問：** 海外で学ぶこと、また、世界共通語である英語に堪能になることだけが、グローバルな日本人になるために役立つとは思えない。グローバルな国際人としての日本人に成長していくために、日本人の子弟が日本の中にも学べるということは何だと言えるだろうか。特に、小さい頃から少しずつ学んだり、訓練したりする力、能力というものがあれば、それはどのようなものだろうか。

**【猪股俊哉先生の回答】**

英語が堪能であってもグローバルな人とはいえないし、英語が堪能になることがグローバルになるために役立つと言えないというのは、その通りだと思います。

英語を通じて、英語を使って、何を伝えるのか、どう考えるのかが、どのように人とかかわっていくのか、どうやって課題を解決していくのか、ということなんでしょうね。

おそらくみなさん同様のことをおっしゃっていると思いますが、日本人が日本にいても、海外にいても、小さい頃から身につけてはならないのは言語スキルです。日本語で表現する（話す、書く）訓練、日本語を読む訓練が小さいうちからしっかりとされていることで、相手に伝わるように日本語で考える、日本語で表現する、相手の気持ちや考えていることを推測することができる、先読みができることになるように思います。

これが日本人としてのアイデンティティではないでしょうか。

日本語での思考し表現する力がしっかりと確立すると、日本語が英語に変わっても、言語習得のフィルターはぐんと薄くなるのではないのでしょうか。

では、どうやって日本語に小さい頃から触れるのか。どうやって質の高い日本語に触れ続けるかです。

ひとつは読書。しっかりとした日本語で書かれた文書、書籍を読む。また、読んだ文書、書籍などを説明することも大切です。

他には、良質の会話を継続する。論理的な会話や感情を読み取る会話を継続する等ではないでしょうか。

私が中学校の担任をしている時も、読書の推奨、教室における学級文庫の整備、読み聞かせ、ディスカッション活動は徹底的に行っていました。

そうした訓練により、子どもたちは、日本語の定着における量を増やし、質を高めていくことにつながると思っています。これは海外の日本人学校でも日本以上に行いました。

ちょっと説明不足なところもありますが、私としてはそんなふうに考えております。

**【原田 晋先生の回答】**

「グローバルな国際人としての日本に成長していくために日本のなかにも学べること」について、私自身はよくわかりません。ただ、インドネシアのことを発表したので、インドネシアで学校を設立したデワントロというとてもグローバルなインドネシア人を例に、そのことを考えてみました。

**デワントロ（スワルデイ・スルヤニングラット） 1889～1959**

1885年、5月2日、ジョグジャカルタに生まれた。子どもの頃、読書や芸能を通じ、ジャワ文化

に親しんでいた。また、オランダ語の学習にも熱心だった。青年期には新聞や雑誌に投稿し、記事を多数書いた。このことが注目され、日刊紙の専任編集者となった。やがて、民族主義運動を展開し、オランダ植民地政府を批判する記事を書き始める。1913年、「もし、私がオランダ人であるなら」の論稿が、筆禍事件を起こし、19年までオランダで追放生活を送ることになった。この論稿はオランダの独立100年を祝う式典を前に書いたもので次のことを趣旨とした。「私がオランダ人なら、私はいまだ植民地である国で独立の記念式典を祝うことはない。その前に、先ずわれわれが支配している民衆に独立を与え、そして、その後ではじめて独立式典を祝うだろう。」

オランダ語という外国語で自分、自分の民族の考えを主張したこの論考はマレー語にも翻訳され植民地政庁とインドネシアの人々に大きな影響を与えた。

オランダでの追放生活中、デワントロは西洋の学問を学び、知識を身につけた。彼は西洋の知識人がアジアの伝統的理念、知恵に深い関心を抱いていることを知り、ジャワ文化の価値を再認識した。そして、ジャワ文化の理想型を再生し得るならば、そのことはジャワ文化とジャワ主義への逃避や退行ではなく、自らを世界史の先端にたたしめることになるという確信を持つようになる。外国の文化を知ることにより、自分の民族の文化を再認識することにいたったと言える。

インドネシアに帰ることが許され、彼は祖国に学校を作った。これが、1922年にジョグジャカルタに設立されたタマンシスワ学校である。そこで彼は主体性を育てる教育を始める。「トゥット・ウリ・ハンダヤニ」（子どもの後から歩き、子どもが道を間違えそうになった時には手をさしのべ正しい道に戻す）が、その標語であった。

インドネシアの教育文化大臣となつてからは、多様な民族、多様な文化を持つ国の中で、人間のあり方、人間関係のあり方に大きな影響を与えた。

### デワントロに見るグローバルな資質

- ・ 自国の言語（文化）を学んだ。そのことにより、外国語（文化）を知り、さらに、自国の言語（文化）の再認識をした。この過程の繰り返しのなかで思考が広がり、深まっていった。
- ・ 外国語を主体的にツールとして使うことができた。
- ・ 自他の主体性を育て、大切にした。
- ・ 多様性の中で共生する力を育み、大切にした。

以上の4つのことを日本にいても学べることとして、デワントロを例に考えました。

### 【渡部 淳先生の回答】

#### ■未知への好奇心、新しいものへの自律的理解を促す基礎的教養力、自律的思考・理解・判断力、そして、さまざまな国・地域・文化の人々とオープンに触れ合う体験

この少し難しい質問に対する私の答えは、未知への好奇心を育み、新しいものへの自律的理解を促す基礎的教養力、自律的思考・理解・判断力、そしてさまざまな国・地域・文化の人々とオープンに触れ合う（あんまりゲームとか友好とか交流を意識し過ぎた枠組みに囚われたものでない、という意味で）体験を持つことだと思います。少し無責任で乱暴な言い方かも知れませんが、現代の情報化社会ではあらゆることを知ることが簡単になった一方で、それ故に1つ1つを深く、自分のこととして考えることが難しくなっていると思います。情報やニュースに出会った時、それを面白いと感じられる感性は何によって育まれるかというと、普段の読書だけではなく、家庭や学校で堅いテーマについて会話したり、ニュースについて会話したり議論したりしている大人を見ることな



ど、普段の生活の中に潜んでいる様々な要素によるものだと考えています。ただニュースを見たり、新聞を読んだりさせるだけでは不十分だと思うのです。やはり、家庭や学校で周囲の大人が自分たちも世界の情報や課題に対して思想的に取り組むということを実践している姿を見せ、同時に子どもたちにもそうするように意図的にきっかけを与えたり、「お父さんはこう思うが、おまえはどう思う？」と対等な人間として責任を持って考えさせる習慣をつけてあげることが大切な政治的・文化的再生産の過程ではないかと思います。

### ■グローバル人材は、人より牛の数の方が多いところでも育つ

ただ、概念的に考えることに若い人間は耐えられませんので、ドキュメンタリーのような動画、実際にいろんな背景を持つ海外からの人々や、海外経験豊富な人に直接接触することも、現場に行ってみたいと思わせ、課題や情報に「百聞は一見にしかず」のリアリティを与えるのに寄与すると思います。

私は牛の方が人間より数の多い過疎の複式学級の小学校で育ちました。でも、たまたま父親が中学教員で、家庭の中で新聞やテレビのニュースやNHK スペシャルのようなドキュメンタリーについて親が話したり議論したり、たまに意見を聞かれたりする環境にありました。他のどの子の家よりも本が多かったですが、本の多さよりも、それに触れ考えることを日課、喜びとする大人の実践が、私たち子どもをそういう活字の世界に誘ってくれたことの方が大事だったように思います。

小学生までは、自分の見たいアニメなどの番組で夕方に見られるものは30分一本と決められて、それ以外は親の見るものを見ていたのも、今となってはとても良かったと思います。戦闘モノが好きな弟の仮面ライダーと魔法少女ものが好きな私の時間帯は重複しましたが、一週間おきに見る（当時録画する機械がないので）、自分の番でも最終回は相手に譲るなど、忍耐と「紛争解決」の方法も学んだような気がします。

小学校1年から田舎で海外に関心を持つキッカケはいくつかあったと思います。地球儀や地図が好きで、ソ連はなんでこんなに大きいのだろう（メルカトル図法で大きく見えただけなのだけど）、大きな国はエライのか？など親友と話したり、そんな友人や周囲の環境に恵まれていました。また、当時ロッキード事件の調査でアメリカの大使館にいた伯父が、英語の巨大な絵本やオモチャや様々な「変わった」（当時は）「進んだ」ものを大きな箱で送ってくれたのも、アルファベットや英語に早く関心を持つキッカケとなったと思います。家に辞書類が豊富にあったことも幸いでしたが、辞書の引き方や楽しみを教えてくれる大人がすぐそばにいたというのは本当に幸運なことでした。

### ■世界の広さと異質性を体感する

私が中学生だったころ、中学にはまだAETがない時代でしたが、英語の先生が街にいたカナダの若者を学校に連れてきてくれました。そのカナダ人と英語を使って触れ合うことで、一気に世界が広がり、世界というものが持つ広さと異質性を身体感覚として身につけることができたように思います。自分でも、International Junior Art Camp という世界10か国ぐらいの同年代の若者と占冠のトマムリゾートと一緒にテント生活をしながらアート作品を作るというイベントに参加し、自分の英語がまだまだ通じないことや、帰国子女のペラペラな少年がいることに刺激を受けたり、そこで友だちになった海外のペンパルと文通したり、実体験として世界に接触しました。そうした経験の中で英語を実際に使うことで、英語の勉強は必要なものになっていきました。間違った言動で後悔するようなこともありましたが、相手と理解し合えたり、理解が広がった時の手応えは、今でも貴重な財産となっています。

そんなふうにして英語の勉強にも力が入り、中学校の英語暗唱大会での全道入賞や、高校の英語弁論大会での優勝（1年時）を果たしたり、英検準1級を取得（3年時）できたり、さらには、国

連職員や国際弁護士などのキャリアに関心を持つようになりました。そして、大学時代のアジア放浪を経て、結果的に国際政治学者を目指すことになり、イギリスの大学院への留学、ドイツの研究所勤務という道が開けていきました。

### ■「～したい、～してみたい」という若者の健全な欲求をかきたて、「知るは喜びなり」と言える人を育てる

長々と書くことになってしまいましたが、自分の人生を振り返ってみると、幼少期の世界への知的好奇心を掻き立ててくれるキッカケが転がっているか、それを気づかせてくれる大人がいるか、海外に行く必要はないけれど、好奇心や理解を実感させてくれる体験や経験があるか、というごく当たり前のことがグローバル化時代を生き抜く力を手に入れるための必要条件のように思います。

「～したい、～してみたい」という若者の健全な欲求をかきたてる、リアリストだがオシャレでユーモアのある大人が、若干シュールに若い奴の背中を押してやる、そんな文化のある社会なら、グローバル化だろうがなんだろうが大丈夫。一生懸命何かに取り組むことが、大変だけど面白いということ、大人が実践する背中語り、その背中を見ながらいろいろやってみる若者の成長を、大人がちょっかい出しながら見守る。コミュニティ、家庭、学校、社会、国家が「みんなで」「自分のこととして」ゆるく関わっていけば良いのではないのでしょうか。そんなふうに大人が子どもの成長に関わる機会が部活やヨサコイだけで終わってしまうのではなく、そこに「世界」も少し入れてやる姿勢が大切なのではないかと思います。

そのとき、ものごとを儲かるかどうかで判断する姿勢はひとまず置いておきたいものです。何事も、儲けようと思って作っていくと、儲からなかった時の絶望は埋めようがありませんが、知ったり交流したりしながら自分も相手も変わっていくプロセスを楽しめる姿勢や文化を若い人たちに（勿論大人にも）根付かせれば、儲かっているかいないかだけで一喜一憂しない豊かな文化が生まれると思います。「知るは喜びなり」と言える文化であり、世界の人々と共有可能な文化です。

客が来る（かもしれない）から、それに対応できるように備えをしなければならない、という発想も結構なのですが、もっと基礎的なところに立ち戻って、「知る、関わる、変わる」ことを知的に楽しめる余裕のある大人を作っていくことが、日本の将来社会を本当の意味で豊かにし、ビジネスにも強い環境を作り上げていく道ではないのかと思います。英語学習も、そのような行程の中で考えると、ある者は楽しみながら、また、ある者は歯を食いしばりながら勉強するというのはごく当たり前のことで、どう学ばせるべきかを議論したり、特定の方法で学ぶことを強制するようなものではないと思うのです。ですから、観光英語、ビジネス英語、インターンシップなどといった実用的、実践的な科目は、どれも必要なものではありますが、そこに英語学習の出発点があると思わせるような教育をしては、かえってグローバル化に弱い大人を増やす結果になってしまうような気がしてなりません。

### ■北海道という恵まれた環境の中で、自由に発想し、柔軟に思考する姿勢を！

きっかけや環境があれば、そこそこの大学に入って、一流の大学院に留学し、ヨーロッパで働いたり、帰国して大学教員になったりできますよ——それが私の一番訴えたいことです。都会の文科省直轄学校での教育を否定はしませんが、そういう所でのどちらかと言えば画一化された教育よりも、子どもたちが、この自然に恵まれた北海道の大地で、自由に発想し、柔軟に思考する姿勢を身につけていけるよう支援していくことの方が、グローバル人材の育成には適しているのではないかと思います。

## 【平塚隆寛氏の回答】

グローバルな人には正義感を持って欲しいと思います。

確かに日本は教育や政治や将来の問題など多く抱えているとは思いますが、日本以上に治安のよい国は少ないです。世界は不条理にできていて、貧困や格差などは日本よりも顕著であると思います。

これに対して正義感を持って解決する心を持てたら、素晴らしい日本人であると思います。そのような正義感を持てる人になるためには、子供の頃から情緒あふれる経験をするのが大事であると思います。

子供の頃にできるかぎり外で遊び、友達と喜びを分かち合ったり、親友と喧嘩したり、親友をかばったりといった経験が、精神的に成長する上で、考え方や行動に影響すると思います。

小さい頃は直感で行動することが多いですが、その頃から正しいことと間違っていることを区別し始めます。もちろん、これらは小さい頃に誰もが学べるごくごく普通の経験です。都会では難しくなっているようですが。しかし、これらの経験は既に高校生ぐらいから少なからず考えに影響しているはずです。

どの言語をしゃべるにしても、間違いは間違いだなどとはっきり言えるような積極的な正義感は、おそらく元を辿ると、小さい頃からの経験に依存しているのではないかと思います。

もちろん、間違いは間違いだなどと、日本語だけでなく英語でも表現できたら素晴らしいと思います。

この他にも多くの要因がグローバルな人をつくり上げるということは承知の上ですが、私なりの一つの考えをここに提示しました。

(担当：久野)

久野寛之（札幌大谷大学 教授）

## 第11回 「ほめる・頼む・感謝する・同情する」—その(2) 頼む・感謝する

### 「頼む・感謝する」がなぜ「小学校からはじまる実用英語」？

感謝と謝罪は、人間が日常行っている言語行動の中で最も頻繁に用いられる機能の二つとされています<sup>1</sup>。つまり、それだけ重要な対人機能だということでもあります。『謝罪の王様』<sup>2</sup> などというタイトルで土下座文化を揶揄した映画が大ヒットする日本社会においては特にそうだと言えるでしょう。それだからなのか、日本語には、この二つの重要な機能を一石二鳥で遂行させてくれる便利な表現があります。それは「どうも」、あるいは、それに「すみません」を付け足した「どうもすみません」ですね。

80年代後半、アメリカの大学で日本語を教え始めて間もなくの頃のある日、私が所属していた現代言語学部の学部長が私を呼び止め、ある新聞の4コマ漫画 (four-panel comic strip) を見せてくれました。その漫画のことを今も鮮明に覚えているのは、その4コマの吹出しのセリフがすべて“Domo”の1語だけだったからです。1コマ目は朝通勤途上で誰かとすれ違って目が合ったときに、挨拶代わりに「どうも」、2コマ目は、何か迷惑をかけて謝るときの「どうも」、3コマ目は、何かしてもらって感謝するときの「どうも」、最後の4コマ目は、お別れのいとまごいのときの「どうも」。「どうも」というわずか2音節で、挨拶・感謝・謝罪の言語機能が全部まかなえるという世にも変わった言語を面白く可笑しく表現した漫画だったように記憶しています。

<sup>1</sup> Coulmas, F. (1981). Poison to your soul: Thanks and apologies contrastively viewed. In F. Coulmas (Ed.), *Conversational routine* (pp.69-91). The Hague, The Netherlands: Mouton. や Ide, R. (1998). “Sorry for your kindness”: Japanese interactional ritual in public discourse. *Journal of Pragmatics*, 29, 509-529. を参照。  
<sup>2</sup> 2013年作のコメディ映画。脚本は、クドカンこと宮藤官九郎、監督は水田伸生。

- |       |  |
|-------|--|
| 第1回：  | ○と×                                      |
| 第2回：  | 数と数字                                     |
| 第3回：  | アルファベット                                  |
| 第4回：  | “Nice to meet you.” と “Good to see you.” |
| 第5回：  | “Excuse me.” と “I’m sorry.”              |
| 第6回：  | “Sir” と “Ma’am”                          |
| 第7回：  | “Uh-huh” ・ “Uh-uh” ・ “Uh-oh”             |
| 第8回：  | “Yes” は “Yes”, “No” は “No” (1)           |
| 第9回：  | “Yes” は “Yes”, “No” は “No” (2)           |
| 第10回： | ほめる                                      |
| 第11回： | 頼む・感謝する                                  |

80年代は、notional-functionalism（概念・機能主義）の外国語教授法がもてはやされていた時代でした。文全体を部分に分析して、各部分に主語などの目的語だのといった文法ラベルをつけ、これこれこういうラベルの部分のをこれこれこういう順番に並べると、これこれこういう意味になるんですよと説明する文法主義に代わって、文全体を部分に分けるところまでは同じでも、細かく分けすぎず、大きな部分ごとに、こう言えばこんなことができるだけ説明して（例えば、文を“Would you”と言って始めれば、「人にものを頼む」ことができると説明して）、できること（機能）をどんどん増やしていく機能主義が外国語教授法の期待の星となっていました。勿論、私も、最小限の日本語で最大限の言語機能をマスターできるような教え方を心がけていました。

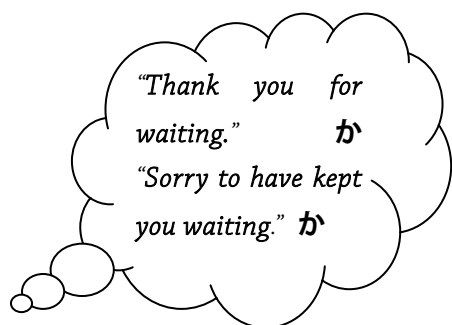
件の学部長は、夜間の成人向け日本語講座の受講者でもありましたから、私の授業で習った「どうも」にそんなマルチな機能があったとは！と思って驚いたのでしょうか。私にその記事を見せ、「ヒロ、こんな大事な情報は、もっとちゃんと教えてくれなきゃだめじゃないか。」とでも言いたかったのかもしれない

ん。いずれにせよ、学部長の意を酌んで、私はその4コマ漫画を授業で見せ、説明をしたと思います。今回この記事を書くにあたり、その漫画が今もネット上のどこかにあるかもしれないと思って調べてみましたが見つけられず、読者の皆さんにご紹介できないのが残念です。



いつものように前置きが長くなりましたが、実は、この「どうも」の便利さが両刃の剣で仇となるというのが今回「感謝」を取り上げた理由です。まだぴんと来ない方も多いと思います。そこでまず思い出していただきたいのが、この連載シリーズの第5回の記事で紹介した「素朴語彙仮説」(“naïve lexical hypothesis”)です。学習している言語の語彙と自分の母語の語彙との間には完全な1対1対応があるはずだという思い込みのことを指します。外国語を習い始めたばかりの学習者は、この仮説を無意識に適用して、「どうも」という一つの日本語に、辞書に載っている英語の一つを当てはめ、それで覚えてしまう傾向があることを指摘しました。「どうも」は“Hi”でも“Good morning”でも“Good evening”でもあり、また、“Thanks.”でも“Sorry.”でもあります。だから、確率は低いですが、「どうも」=“Sorry.”と覚えてしまうと、「どうも(ありがとう)」と言うべき時に“Sorry.”(「どうも(すみません)」)と言ってしまふことになりかねない。子どもたちが頭の中で必死に翻訳しながら話しているような場合は、そんな冗談のようなことが起こりうるということです。

でも、問題はそれだけではありません。そういう言語的な問題に加えて、文化の問題が絡んできます。どうということかと言うと、「謝罪の王様」が統べ治める日本語王国の国民は、英語文化圏の話者が「そこは感謝だろ」と思うところで、感謝よりも先に謝罪をしてしまう傾向があるということです。



残念ながら、これは筆者の自己観察と大学での英語教育経験から来る主観的な仮説にすぎません。ただ、お隣の韓国では、韓国人とアメリカ人の大学生を比較した研究で、日本人に関する私の仮説を実証したとも言えるような報告があります<sup>3</sup>。その研究は、

面識のない3人と会議をすることになっていたが、自己都合で会議の日程を急に変更しなければならなくなった場合、その3人にどんなメールを書くかと米韓の大学生に問いかけ、彼らが書いたメールを分析し、その中で使われた感謝と謝罪の表現の数を比較するというものです。結果は、予想通り、韓国人は「申し訳ない」という気持ちを表す表現を多用し、アメリカ人は変更を承認してくれることに対する感謝の意を表す表現をより多く使用したそうです。

このように感謝よりも謝罪を好む傾向は儒教思想によるものだとする研究<sup>4</sup>があります。「儒教思想では、人間の自我を根本的に不完全なものみなすため、自己改革、自己への善行、他者への善行を実現するために必要な謙遜(modesty)が強調される。」そうです<sup>5</sup>。一方、『すみません』と言うことは、アメリカ人にとっては、自分の非を認めることであり、ひいては、自信のなさを示すものであるのに対して、日本人にとっては、聞き手への配慮と思いやりを示すものだ」という研究<sup>6</sup>があります。これらの主張が正しければ、日本人の謝罪もきわめて儒教的だと言えます。したがって、もし謝罪と感謝についての韓国人の言語行動が儒教的な文化風土に根差しているのだとすると、儒教的文化を共有する日本人大学

<sup>3</sup> Lee, H. E., & Park, H. S. (2011). Why Koreans are more likely to favor “apology,” while Americans are more likely to favor “thank you.” *Human Communication Research, 37*(1), 125-146.

<sup>4</sup> Kim, S. (2003). Korean cultural codes and communication. *International Area Review, 6*, 93-114. この論文は、上掲論文 Lee & Park (2011) の p.128 で引用されています。

<sup>5</sup> Kim (2003) の主張。前掲論文 Lee & Park (2011) の p.128 より引用。ちなみに、注1の2つの参考文献も、Lee & Park (2011) の p.125 で引用されているものです。

<sup>6</sup> Sugimoto, N. (1997). A Japan-U.S. comparison of apology styles. *Communication Research, 24*, 349-369. この論文も、上掲論文 Lee & Park (2011) の p.128 で引用されています。

生に同じ日程変更依頼メール実験を追試すれば、韓国人大学生と同じ結果になる可能性はきわめて高いと言えますね。

実のところ、実験ではなく、実社会の現実にも、この実験で明らかになった英語文化圏と儒教文化圏の差を示す証拠があります。イギリス国王公認のある団体のニュースレター<sup>7</sup>に掲載された“Powerful Conversations”というコラムには、“Language is critical. There are some simple rules. For example, if you are late for a meeting do not say ‘sorry I’m late,’ instead say ‘thank you for waiting.’”（ものの言い方が決め手になります。簡単ないくつかの規則を覚えてください。たとえば、もし誰かとの打合せの時間に遅れたら、「遅れてすみません」と言うのはなりません。代わりに「お待ちいただいております」と言いましょう。）とはっきり書かれています。一方、私の大学での授業や高校の出前講義で、友だちとの待ち合わせ時間に4、5分遅れたり、アルバイト先で英語を話すお客に頼まれたことをし終わるまで客を4、5分待たせたときに何と言うかと、大学生や高校生に聞きますと、みな、基本は“Sorry”です。“Thank you for waiting.”という答えが出てきたことはいまだかつてありません。私は、学生たちが“ハズレ”の答えを出す度にこう言ってきました。待たされた側としては、「待たせてすみません」と謝られると、「全くもってその通りだ。ほんとに迷惑をこうむったぜ。どうしてくれるんだ。値引きでもしてくれるのか?!」と、とても損をした気持ちになるものだが、「お待ちくださって、ありがとうございます」と感謝されると、何だかとても良いことをしてほめられたような気持ちになって、待たされたのにかえって得をした気持ちになる。だから、“Sorry”が口をついて出るのは仕方がないが、その後必ず“but thank for waiting.”と言えと。

<sup>7</sup> CIPD (the Chartered Institute of Personnel and Development 英国公認人事教育協会) という団体の北アイルランド支部のニュースレター *Soundbytes* の第3巻3号(2006年冬号)の“Powerful Conversations”という欄の中に掲載された記事です。2017年3月10日取得 <http://www2.cipd.co.uk/NR/rdonlyres/48C3A196-9D53-4FBF83E6-D2202C08C1EC/0/CIPDJanNewsletter.pdf>

## じゃあ、「頼む」の場合は？ 何が問題？ どうして小学校から？

感謝するというのは、言うまでもなく、相手が何か自分のために何かをしてくれたときにすることです。でも、こちらが頼む前から相手が何かしてくれた時にも当然感謝します。どちらの場合もありますが、よくよく振り返ってみると、小・中・高で、生徒としての自分が級友にものを頼んで何かをやってもらい、やってもらったことに感謝するという経験は、校舎の中ではあまりない、あるいは、ほとんどないと言っても言い過ぎではないかもしれません。この場合の「頼む」というのは、「～して」という命《令調の依頼》ではなくて、「～してくれる？/～してくれない？」「～してもらえる？/～してもらえない？」という《頼みごとの依頼》を指します。

授業中のことをちょっと想像してみると、

- (1) 先生が生徒に何かをしてあげて、してもらった生徒が「ありがとう」と言う。
- (2) 生徒が別の生徒に何かをしてあげ、してもらった生徒が「ありがとう」と言う。
- (3) 先生が生徒に何かを頼んで、生徒がそれをしてくれたときに、先生がその生徒に「ありがとう」と言う。

上の(1)～(3)のような場合は、具体的な場面がいろいろと思いつかびますが、

- (4) 生徒が先生に何かを頼んで、先生がそれをしてくれたときに、生徒が先生に「ありがとう」と言う。
- (5) 生徒が別の生徒に何かを頼んで、頼まれた生徒がそれをしてくれたときに、頼んだ生徒がしてくれた生徒に「ありがとう」と言う。

というような場面は、(1)～(3)の場合ほど簡単に思いつきません。(4)の場合は、「先生、～して(ください)」という言い方になるでしょうし、(5)の生徒同士の会話も、北海道弁なら「～しな！」とか「～すれ！」という形になる方が自然な気がします。(5)では、家に忘れてきたり、手持ちのものがなくなった文房具の貸し借りで「おい、ちょっと鉛筆貸してくれないか」のような言い方はするかもしれませんが、それ以外にはどんなことを頼むでしょうね。

子どもたちがお互いに英語を使ってコミュニケーションするというのは、多少の例外はあるかもしれ

ませんが、校舎の中、もっと具体的に言えば、授業の中に限られているはずで。そうすると、「～してくれる? / ～してくれない?」「～してもらえない? / ～してもらえない?」という形で行われる《頼みごとをする》・《依頼する》という言語機能を子どもたちが使う機会はとても限られてしまいます。

残念なことに、大学に入った段階で英語のとても不得手な学生たちに共通して認められる特徴は、「人にもものを依頼する」というような極めて基本的な言語機能を遂行することができない学生が多いということです。その一因は、単純に、英語でその言語機能を使う機会が少ないということだと考えられます。

「お願いする」ときは“Would you...?”だと、例の、機能主義のやり方で教えればすぐ覚えられそうですが、現実とは違います。平均値で言えばごく標準レベルと言える筆者の学生たちの中には、1年かけても覚えられない学生が1割～2割は存在し、習熟度の低いグループでは2割を超える場合もあります。

そして、もう一つ、この問題に輪をかけて難しくしている原因は、やはり、あの「素朴語彙仮説」です。習いたての初学者あるいはそれに相当する習熟度しかない学習者は、どうしても1対1の日英対応で覚えていきます。ですから、言語機能1つに対して意味が1つというのが理想です。ところが、「人にもものを頼む」という言語機能を遂行するための言語形式は、中学で出てくるごく簡単なものだけでも、

“Will you...?” / “Can you...?”

“Would you...?” / “Could you...?”

のように4つもあります。1つですまないのです。さらに、また、「誘い」(～しない? / ～しませんか?)の言語機能を担う“Would you like to...?”という言語形式が入ってくると、“Would you”と“Would you like to...?”の区別がつかなくなり、この二つを混同してしまっているがゆえに習得に至っていないという事例が試験の解答などでよく見受けられます。

既にみたように、学校の教室世界の対人関係は、生徒同士が互いに頼み事をする方が珍しいのですが、実社会の対人関係では、肉親間や友人間であれ、商売上の顧客間であれ、頼みにくいことを何とか頼みこんでやってもらうということが頻繁に起こります。世界の檜舞台に飛び出し、ビジネスの第1線で活躍するような人物は、こんなレベルで困ることは全く

ないはずですから論外。しかし、インバウンドで海外からの観光客を迎えるようなビジネスの現場では、学校で英語が大の苦手だったというような人物が接客に当たらなければならない可能性が高くなります。日本の文化や慣習を知らずに行動する外国人に、丁寧に「それはやめていただけませんか」などと言わなければならないケースも沢山出てくるのではないのでしょうか。その意味で、英語を学校教育で教える以上は、「日本人の9割に英語はいらない」<sup>8</sup>と切り切って、「できない」子どもを切り捨ててしまうのではなく、各言語機能に1つの最も便利な言語形式を対応させ、その対応を小学校から繰り返し様々な場面で使えるように工夫してやれば、誰でも基本的な対人言語機能は十分にこなせて、英語会話が気楽にできるようになるはずで。

## まとめ

感謝するには、“Thank you.”と言う。ただそれだけの簡単なことだ。教師なら誰もそう思うでしょうが、今回の連載では、その簡単な2つの単語を適切な場面で使うのは決して簡単なことではないということを示しました。ことばそのものを知っていても、それを適切に使えなければ意味がありません。感謝の気持ちを「ごめんね」という謝罪表現で表す日本語文化の中で育つ私たちは、“Thank you.”と言うべき時に“Sorry.”とやってしまいます。こういう問題の解決こそ、小学校から高校まで、年月をかけて常に意識的に取り組むに値することだと思います。

それから、言語機能と言語形式を1対1に絞り、繰り返し様々な場面で使う機会を作ってあげることの大切さも示しました。今回取り上げた例で言えば、「依頼する」ための表現は、相手を選ばない“Would you”に絞り、「人にもものを頼む」には“Would you”で文を始めるんだよと教え、「誘うときは、いつも“Would you like to”だよ」と《バカの一つ覚え》でサラッと教えれば良いだけ。苦勞のしどころは、教室の中で子どもたち同士が「～してくれない?」と依頼し合い、「ねえ、～しない?」と誘い合える場面をどうすれば沢山作れるかです。でも、先生方は工夫の天才。自然な場面のお膳立て、よろしくお願ひします。

<sup>8</sup> 成毛眞 (2011) 『日本人の9割に英語はいらない—英語業界のカモになるな!』祥伝社

## お知らせ

### ◆会員募集について

実用英語教育学会では、新会員を募集しております。年会費は4,000円です。会員の皆様は、研究会や大会の参加費が無料になるほか、口頭発表および論文発表の発表資格を得ることができます。

### ◆研究紀要の発行について

実用英語教育学会では研究紀要（年1回発行、査読付き、ISSN取得）を発行しております。内容については、学術的な実験・調査および理論的考察等をまとめた「研究論文」と、教育実践にもとづく知見を報告する「実践研究」の2部構成となっております。締切は8月末日ですので、皆様の投稿をお待ちしております。

なお、投稿者資格として本学会の会員であることが規定されておりますので、まだ会員になっていない方は事前に入会手続きをお済ませくださいますようお願いいたします。

そのほかの詳しい投稿規定については、事務局までお問い合わせください。

### ◆研究会・研究大会について

例年10月に研究会、2月に研究大会を開催しております。この度の総会で、2017年度はそれぞれ「外国語教育におけるアクティブラーニング～演劇的手法を活かして～」、「英語教育と地域貢献～地域のグローバル化と英語・外国語教育～」というテーマで行うことが承認されました。ただ、総会での会員の意見とは別に、2月の研究大会のアンケートでは、「在日本の”ハーフ”の子どもたちや、外国籍の子弟の子どもについて」、「大学入試における民間テストの導入における問題点」といったテーマを取り上げてほしいというご意見もいただいております。来年度以降の参考にさせていただきます。

他にもご希望・ご意見などがありましたら、いつでもお気軽に事務局までお寄せください。



### 編集後記

編集後記に変えて、2月の研究大会のフォーラムについてのご意見の一部をご紹介します。

- ・宗教の影響、イラン人のこと（フィールドに行くとわかること）、平塚さんの帰国子女の経験などが勉強になりました。「自律的に考える人、英語を話すことができればグローバルな人間ではない。」←その通りですね。
- ・日本の英語教育の問題点を、多様な観点から探ることができて良かったです。海外に行くことがなくても「グローバル人材」の基盤を養うことは、学校でも可能だと改めて学びました。
- ・グローバル人材の定義のお話が大変興味深かった。日本の公立学校での英語教育に何を求めるかをお伺いしたかった。

紙幅の都合全部はご紹介できませんが、全体を通して「興味深い」と「学べた」といった声が多くあったのはとても光栄です。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

#### 実用英語教育学会

編集：SPELT Newsletter 編集委員（石川希美・久野寛之・杉浦理恵）

発行：2017年4月22日

事務局：〒065-8567 札幌市東区北16条東9丁目1番1号

札幌大谷大学社会学部地域社会学科 石川希美 研究室内

TEL: 011-742-1651 (代表) Fax: 011-742-1654 (代)

Email: spelt.info@gmail.com